ブイズがカバンから零れ落ちる――……

ドロシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブイズがカバンから零れ落ちる――……

【Ｎコード】
Ｎ６９１９Ｒ

【作者名】
ドロシー

【あらすじ】
なんか知らないけれど、ポケモンの「パール」の世界に来てしまったオリ主（普通の女子中学生）が、濃ゆい仲間達と旅をする話（になる予定；）。

1、ビッパさん？　え？

えっと、えっと……はい？

私は今目の前の状況に驚いて動けなくなっている。なぜなら――。

「ど、どうしてこんなとこにビッパがいるんじゃい！」

いつものようにやっているパールのカセットでしか見かけない二次元なふわふわしているアライグマっぽい生命体が目の前にいたからである。

そもそも、私は何をしていたかというなら電車の中でだらだらと席を占領してパールでイーブイ育成をやっていたわけで、それ以外のなんにでもなかったはずだ。別にいつもと同じように一人でだらだらとDSいじってただけだし。そう、何事もなかった。否、あったかもしれない。そうだ！　あの時いきなり衝撃が電車から体に伝わってきて、頭をDSに打ちつけ……。

もしかして天国？　夢？　とりあえず頬の少ない肉をつねってみるけれども、痛い。すごく痛い。うん、夢じゃないみたいだな。じゃぁ、天国？　とりあえず足はあるけれど確かめようはないみたい。

で、そろそろ現実逃避を止めようじゃないか。

さて、どうして私の目の前に見た目2次元なのにどう考えても3次元なビッパがいるのだろうか？　触ってみたらきっと気持ちよさそうな毛に覆われたビッパが。

それにしても、あぁぁっあ！　触りたいよ。猫大好きな僕ちゃんとしてはああいう柔らかくて気持ちよさそうな子は大好きなんだよね。犬とかは苦手だけれど、ビッパはちょっと猫っぽいし。ただ、必殺前歯っていうのりでかまれたら嫌だよね。うん。

とにかく、ここはどこかは置いておこう（現実逃避ではない！！）
今からどうするかを先に考えなければ。

選択肢１　ビッパをなでなでする
選択肢２　この場からゆっくりはなれて荷物の確認
選択肢３　近くに街があることを信じて走り回る
選択肢４　誰かが現れることを願ってなんかを叫ぶ
選択肢５　現状維持

とりあえず１はかまれたりしたら終わりだから無理。２は……そういえばスクバも肩にかけっぱなしだしちょうどいいかもしれない。３と４は無謀すぎるよね。うん、とりあえず荷物の確認でもしよう。
その時、森の中からいきなり私と同い年くらいの少女が飛び出してきた。ただし、着ている服がクラスメイトがよく着ているような黒いゴスロリというところが問題だと思う。考えてみればここはビッパなんかも出てきちゃう森林らしき場所なのである。もうミスマッチもいいところ。

なんて考察していると、彼女はひっと悲鳴を上げた。私を見てだ。ビッパを見てじゃなくて私という普通の人間を見てだ。彼女とおなじ。もしかして、ゴスロリを着ていない人は異端です、なんていうことではない限り。なのに、なのに！　私の顔が可笑しいの？　ねぇ？　どうどうと笑いなさいよ！
っと、キャラが崩壊しかけてきた。

「えっと、誰？」

まぁ、このまま考察を続けてもしょうがないのでとりあえず話しかけてみることにした。こんにちは、なんていっても意味が無いので思ったことをね。

ここで神様なんて答えてくれれば紛れもなく天国だというのがわかって助かるんだけれど……。

すると、またビクッとしたように顔をこわばらせて一歩下がってゆく。正直、ものすごく不愉快だ。自分の顔を見て怖がられることがこんなに不愉快だとは思ってもみなかった。そんな時、一つの可能性に思い当たる。こういう風に異世界っぽいところに飛んでよくある事態。それは……

「もしかして、言葉通じない？」

私がで・き・る・だ・け優しく問いかけると彼女はぶんぶんと首を左右に振りながらもう一歩下がってしまった。とりあえず、言葉だけは何とか通じるようだ。助かった……。

「ならさ、なんか答え……」
「きゃぁぁっぁぁぁ！！！」

なんかいきなり叫ばれた。ゴスロリ少女――もとい実は茶髪に黒い目で美少女なかんじの少女に。えっと、へこむ。普通に女子だけどここまでやられるとへこむ。うん。

否ね、別に仮にこれがただの普通女子とか馬鹿男子とかだったら「へーだから？」で流せるわけですよ。でも、でもでもでも、美少女に嫌われるというのは同性でも意外とへこむ。だって美少女とは仲良くしたいもん！

ただ、良かったことがあればこの声を聞いてなのか森の奥の方からこっちに向かって走ってくる白衣の女性、しかも二次元顔な……ってえ？　もしかして。でも、とりあえずまともに会話できそうだ

し、いいことにしよう。
だけど、彼女はこちらには一瞥もせずいきなりゴスロリ少女と私の間に立ち叫ぶ。
「もうまた研究所から脱出しちゃ駄目じゃない。それに、外に出るなって何回も言ったでしょ……。やっぱり私じゃだめ？　私なんかじゃ博士失格の前に親役失格？　そうよね。私なんて、私なんて駄目な子よね。あなたはやっぱりポケモンと自然の中で生きて行くほうが幸せなのよね。私なんかに保護される筋合いないのよね……」
えっと、まともに会話できる人って誰かいないのかなー？

1、ビッパさん？　え？（後書き）

えっと、はじめまして。どろしーこと駄作者って、順番がちがう！

注意ごと

・　この物語は趣味です。故に、亀更新です。

・　この物語の作者は「推敲？　はい？」という残念な考えの持ち主です。誤字脱字などを発見したら、速やかに申し出てください。駄作者なりに感謝いたします。

・　趣味の癖に感想を貰えばすごく喜びます。きついものでも優しいものでもいつでもウェルカムで！

ではでは

2、ゴスロリ少女が怖いです！

「さっきは取り乱したところ見せてしまってごめんなさいね。本当にごめんなさい。すべては私が悪かったの。私が悪いからこの子が脱走しちゃって。人間が苦手なのにどうして外に出たがるのかしら？　もしかして、私が嫌いだから？　こんな三十路過ぎちゃったいき遅れのお姉ちゃんなんて好きになれるわけないわよね。それに人間っていったら私も人間だもの。やっぱりポケモンたちと一緒に暮らしたいの？　あの時みたいに？　私じゃ駄目なの？」

「ウザ……」

白衣の女性――いいや、思い出してみればパールの最初の方でナナカマド博士が出てくるけれどその助手の片方が女性だった気がするからきっと彼女だ――は、ゴスロリ少女の一言によって俯いて泣き出してしまった。

私はどうすればいいんだ！　、なんて思いながらも出してもらってしまったコーヒーをすすった。

けれど、それは形だけで甘党な私がミルクも砂糖も入ってないようなブラックのコーヒーを受け付けられるわけもなく、出されたからにはのまないわけにも行かずとりあえずのむという動作をしただけ。

とりあえず、私は現状を把握しようと周りをみわたしてみる。

まずどこにいるか。
それは多分ナナカマド博士の研究所だろう。彼女がもし助手ならば其処以外にどこに行くのか良くわからないし、部屋一面を埋め尽くしている機械、本、書類を見れば普通の生活区域でないのは明らか。

っていうか、何処に座ればいいのと聞いて謎の客人に向かって適当に書類をどければ椅子かソファが出てくるかもって適当すぎだろうが！　埋まっているのを何とかしないのが問題なんだよ！　でも、背後にいつもみかんをダンボールいっぱいに入れたものをおいておいて、小説を手元では書き散らし散乱させながら資料を適当に放り投げている私がいえたことではない。

それで、目の前にいる泣き虫なロリっ子属性の女性は助手ならば私の左隣で悠々とコーヒーを飲んでいる藍色の髪のゴスロリ美少女は誰？
もしかしてここに１０歳になってポケモンを貰いにきたとか？
それとも旅の途中に報告に――ゴスロリで旅する馬鹿なんているわけないよね！
じゃぁ、この助手の娘さん？　あとは博士の。

でも、私の記憶では博士に娘がいたような気なんてしなかったし、まぁゲームの話なんてほとんど関係ないのかもしれないけれどさ。

とりあえず、慰めとく？

「元気出してくださいよ（私困るんですけど）」

「ほ、本当にそう思ってるのかな、かな？」

「う……ん、まぁ」

「本当！？　本当に本当に本当？」

「はい、まぁ、そんな感じ」

助手は私のあいまいな言葉を聞くと、なくのをやめて飛び上がる。ヤバい、単純すぎて可愛いです！　眼鏡が少しずれてしまっている辺りとか本当に可愛いです。

だから、ゴスロリ少女。そんなにらまないであげなよ。私まで怖いよ。

助手も察したのか、私とゴスロリ少女を見比べてから、静かにソファに腰を下ろした。この動作だけならば、ものすごく綺麗なのに。

「取り乱しちゃってゴメンね？　で、えっとどうしてあの森にいたのかな？　ほらほら、さっきこの子とあった森」

おっと、とりあえず現状を何とかしよう。ここで下手な答えでもしてしまえばなんか不審な人物に決定され最悪の場合あの昔見てい

たポケモンのアニメの中のジュンサーさんに追っかけられ、街の人たちに白い目で見られるのも嫌だしね。
まぁ、それは飛躍しすぎている話なのかもしれないけどさ、一応気をつけながら話していった方がいいよね。

じゃぁ、どういうべきか……考えがまったくうかばないよ！　だって私は向こうの事情なんて知るわけないんだもん！　この森に特殊な事情でもあってなんか悪さしに着たとも見ようによっては見えるわけで、下手なごまかし方だったら逆に不自然に見えるかもしれないし。ここがネックだな。

「も、もしかして迷ったりしたわけじゃないよね？　たまたま歩いていたら森があったから迷った、とか、とか？」

「あ、はい。そうですよ」

そうだ。森がここにある。そして、そこに迷った。それは普通だ！　しかも私の服装はスクバを持ったセーラー服の少女。学校帰りに近道しようと思ってたまたま迷ってしまった。
うん、ありえるぞ。悪さするような変な人には見た目だけではわからないだろうし。

でも、助手（仮）はその返事を聞くと困ったように首をかしげ眉間に皺を寄せる。なんとなくロリっ子性質を感じるような若い人だなぁと思っていたのにそれだけの動作で一気に老け込んでしまう。
そして、彼女は私と手元に持っている謎の紙とを交互に見る。私は

なんか間違ったことを言った覚えはないよ。うん。そうだよ、間違ったことなんて変なことなんて言ってないし！

「そうですか。ならばお仕置きしなければいけませんね。可愛い子だから迷ったという言葉を信じてあげたかったのですが、残念ながら私は事実を知っていて……」

「はい？」

「だから、お仕置きしなければと」

話が読めないぞ！　私は森に迷ったといっただけでそれはウソって言うわけでもないし（だってここ知らない場所だし）、正直者だぞ！　ぼろい斧を落として、金の斧と銀の斧とを持った女神が湖から出てきても両方強奪するような子だけど、今ばかしは正直だって言い切ります。

だって事情がよめないんだもん！　ただたんに気づいたらあそこにいたっていうわけで何も疚しい事なんてする暇なんてなかったし。

ねぇ、嘘だよねと視線にコメながら助手（仮）を見つめるけれど、彼女の目に私は入っていないみたいだ。というかSですか？　この人は私とか私とかをいじめるの大好きなドSですか？

しょうがないのでさっき何故か悲鳴を上げてきたゴスロリ少女を見つめる。すると、すぐに目をそらされてしまった。ツンデレなのでしょうか？　そして私に味方はいないのでしょうか！

「どうしてお仕置きなんて話に――」

「さぁ、ポケモンバトルを始めましょう！　といってもここで暴れてはナナカマド博士に怒られてしまうのでこっちへ！」

なんでそんなキラキラした笑顔で颯爽と人の話を無視しているの？　もしかしてバトル狂？　でも、研究者としてそれはあって欲しくないな。

でも、一つわかったことがある。ここはナナカマド博士の研究所だ。至ってここはパールかプラチナの世界……シンオウ地方っていうわけだろう。

ただ、そんなことわかってもどうでもい言っちゃどうでもいい。今何故か知らないけれどバトルを始めようとしている人が目の前にいることの方が問題だ。しかも、勝手に私の右手を掴んで変な書類を踏みながら扉に向かっている辺りとか。振りほどこうとするけれど、握ってくる手の力は強くて全く振りほどけない。

しょうがないので素直に引きずられる。ゴスロリ美少女も止めてくれなさそうだし。

全くどうしてこんなことになってしまったんだよ！

2、ゴスロリ少女が怖いです！（後書き）

文脈壊滅してすみません――
極めてわかりにくいところとかあったら、感想に書いてくれると嬉しいです
ではでは

3、不審人物って何！？

「……、飯井崎助手と不審人物のバトルをはじ」

「だから、下の名前で呼んでよ！　いつも言ってるじゃないの。美亜ちゃんってよんでって。あ、お姉ちゃんでもいいよ。もしかして、恥ずかしいの？　てれちゃってるの？　かっわいいー」

「不審人物って僕が何かしたっ！？　それに、私多分ポケモンもってないわよ」

気づいたらさっきまでの森に囲まれた、アニメで見た覚えのあるバトルフィールドにいた。それは本当に気づいたらで、さっきの扉をぬけたらすぐそこにいたのだ。ゲームの中でユニオンルームからバトルルームに移動する時みたいに。

それにしても、ポケモンをもっているはずのない私にどうしろと。しかも、理由もよくわからないうちにバトルを仕掛けてくるなんて、道端で目が合っただけで勝負を仕掛けてくる虫取り少年くらいにひどいよ。考えてみればこっちの世界（？）にきて始めてのバトルの相手がプロフェッショナルていうあたりもひどい。って、考えてみれば不条理だらけ！？

そもそも、気づいたらポケモンの世界にいたっていうのも不条理なのかもしれないけれど、ビッパのモフモフが可愛かったから許す！

「……飯井崎助手と不審人物のバトルを始めます。ポケモンを出してください」

私達のセリフなど無視して審判役のゴスロリ少女の声が響く。響くといってもあんまり大きな声って言うわけでもなく、口の中でもごもご喋っているみたい。しかも、顔も殆どあげないからなんか愛想悪いなぁ。

まぁ、とりあえずスクバの中をあさってみればなんか謎のモンスターボールが落ちてくるかもしれないし、探すだけ探してみよう。

私はそんな事を思いながら左肩にかけっぱなしになっていたバックの中身をあさる。けれど、さっきまで入っていたと思われるＤＳやらペンケースやらも見つからないし、底に手が届かないし、なんかすごく変な感じがする。っていうか、嫌な予感？

とりあえず、その予感の正体を探るべくスクバをひっくり返してみた。すると、まず携帯が落ちてきた。次にちょっと遅れてＤＳとペンケースが。また遅れてルーズリーフとファイルと聖書が。そして、弁当箱も落ちてきた。中身からだけど。あ、財布と賛美歌もだ。と思うと今度は拳銃とカッターもがおちてきた。そして、最後にラノベが二冊ほど。

ここまでで私の荷物は全部……のはずだった。そう、全部だと私

は思っていた。

だけど、次の瞬間スプレー式の何かが１０個くらい落ちてくる。そこにはキズぐすりというラベルがはってあって、なんて考察していると今度は紐が。ヒモをまとめている紙には穴抜けの紐とか書いてある。その後に青いカードが。きっとトレーナーズカード。もしかして、私が使ってたゲームのアイテム？　バッチ入れは落ちてこないけど。

なんて思えば、今度はモンスターボールが落ちてきた。赤と白とで半々に塗られて、スイッチのあるボールなんてモンスターボールしか思いつかない。ただ、それは一つではなかった。落ちたときに地面がドドドっと音を立てるくらいの量。

まぁ、つまりは３００個くらいなのかな？　って、なんでだぁぁ！？

「やっぱり、あなたポケモンハンターだったの？　信じられないよ。こんなちいちゃくてかーいーのに」

「ちいさい言うなぁ！　って違いますから。気づいたら入ってたんです」

「罪状確定」

ああぁぁぁ、なんでゴスロリ少女まで髪の下でイヤーな目つきをするの？　見えないけど。私ハンターじゃないよ？　誰か信じてくださーい！！　濡れ衣なんです。

「やっぱり、私達の研究施設の中の森にいたところから怪しむべきだったのよ。ここに入れる道はあの部屋からの扉だけだからね。しかも、さっきまで私はあそこに座っていたから、随分前から忍び込んでたとしか思えないし。ふふふ、これで私は一気に有名になれるかな？」

「か、空のボールって確立もあるじゃないですか！」

「負け犬の遠吠え」

まだ、負けていないぞ！　失礼な。さっきまで無言系キャラだったゴスロリ少女がなんでこんなに喋ってんのか意味不だよ？　キャラチェンジ？

とりあえず、私はさっきの可能性があるからね、というような視線を飯井崎助手に送る。彼女は私に気づくと、ちょっと困惑したような顔をして、頭をかいてから

抱きついてきた。

「はい？」

「きゃぁぁぁぁ、可愛い。いいわ、いいわ、そうよ。あなたが私とのバトルに勝ったら見逃してあげるわ」

「可愛い、言うな！　じゃなくて、なんでバトル前提！？」

否ね、私だってこの前までこんな扱いばっかりだったから慣れていたけどね、まさかここまできてこの反応はないでしょ。うん。だけど、なんだかんだで見逃してもらえるかもしれないのはありがたいかもしれない。

私はポケモンハンターじゃないんだけどさぁ。

とりあえず、ゴスロリ少女にまた助けを求めてみる。だけど、今度も完全に無視されました。はい、悲しいです。しかも、飯井崎助手は私に乞うような目で見てくるし。ああ、なんか泣きたいよう。

「わかりました。バトルしますよ」

しょうがない。本当にしょうがない。私と飯井崎助手は同時にポケモンボールのボタンを押す。ピッカーンと黄色いような白いような光がでて、それと同時に目の前にポケモンが、現れなかった。

「はい？」

そう、飯井崎助手の前にはちゃんとしたメタモンが出ていたのに、私の前には白く丸いものに緑の丸い柄が入ったものが転がっていたわけで。

「あら、卵みたいね？　えっと、かえのポケモンを出してね？」

というわけで卵みたいです。かっこよくボールのスイッチ押してみて、発光までいったのに卵でした。……ださいな、自分。

さて、気を取り直してテイク2。今度は何が出てくるかな？　私は期待を込めてボタンを押す。またさっきと同じような発光が。

だけど、目の前に転がっていたのはヒンバス（確か1．Lv。ミロカロスにしようとして諦めた奴）。確か、催眠術と撥ねるしか覚えてなかったような。

「すみません。間違いました」

「い……いいわ。うん」

さて、今度こそと思いながらテイク3。さすがにちょっと悲しくなってきたから今度こそ何か出てよ、と願いを込めてボタンを押す。

すると、発光と共になんかすごーく低いうめき声のようななき声が聞こえてきた。確かこのポケモンは……。

『ぱ、パルキア！？』

飯井崎助手と私は同時に驚きの叫びを上げたわけですよ。

3、不審人物って何！？（後書き）

はい、投稿みすりました。すみません。
誤字脱字その他諸々ありましたらコメントお願いいたします。
それにしても相変わらず話が進まないくせに展開が速い……。

4、再戦

「ちょっと、ちょっと本物のパルキアかしら？　この地方に住むって言われる伝説のポケモンの。空間を支配して、たまに捻じ曲げたりしているあのパルキアかしら！？」

飯井崎助手は目を輝かせながら私に聞いてくる。

そう、私の目の前には白くつるつるとした大きな体に、桃色の線を何本か描かれた伝説のポケモンパルキアが居座っていた。私がパールで捕まえたと思われるパルキアが。

ってことは、きまり。あのモンスターボールは私がこの前までにゲーム中で捕まえたポケモンのモンスターボールってこと。ならば、残りは大量のイーブイとかかぁ……。

「って、あなた本当にポケモンハンターだったの！？」

「否、違いますって」

「もーう信じないわ。だって伝説のポケモンなんてあなたみたいな子が直接手に入れられるわけないもの。そうでしょう？　なのに持ってるって事は盗んだ可能性しかないわね。今すぐにジュンサーさんに連絡しなきゃ。ちっちゃなポケモンハンターを捕まえたって」

「ひ、ひどい！」

そ、それはないでしょ！　って、これでポケモンハンターじゃなかったら私は一体なんなんだろうってことになるね。確かに。でも、でもでもでもこれは濡れ衣なんだよ？　ねぇ、誰か信じてよ。

最後の最後の希望を込めて、ゴスロリ少女の方を見る。すると、何故か目が合った。本当に運命的なそんな気がするくらいにぴったりと彼女と私の目が合った。透き通るような蒼い目は私の奥をじっくり覗いてくる。

怖かった。なんかすごく怖かった。

「そうだ、いいこと思いついた！」

私の恐怖で凍り付いてしまった体を開放するように、のんきに彼女は言った。ただ、なんとなくそのいいことというのは物凄く危険なことのような気がして、突っ込みたい。けど、突っ込んだら最後逃げられなくなる。

「あのね、私にあなたがポケモンバトルで勝ったら……」

「さっきと同じじゃない！」

えっと、どこがいいことでしょうか？　つい突っ込んじゃったじゃないの。だけど、私のつっこみなんて気にせず彼女は続ける。

「使用ポケモンは変えていいわよ。空間を捻じ曲げられたらたまったものじゃないから」

「それが普通です」

もういい。自棄になってしまおう。私はパルキアをモンスターボールに戻した後、また適当なモンスターボールを投げる。今度は何がでるかな？

「いけぇ！　私の何らかのポケモン」

「ダサい！」

助手さんが突っ込まないで、と思いながら私はモンスターボールを投げる。また、卵だったらどうするって？　正々堂々と泣くに決まってるじゃないか！

「あ、サン？」

幸いにもまともなポケモンがやっと出てきてくれた。エーフィーだよ、エーフィー。またも巨大系伝説とかじゃなくて良かったよ。

否、ネタ狙いだったらいっそモンスターボールが開かない確立の方が高かったんだけれど。

「よく育てられてるみたいね。だけど、私のメタモンに勝とうなんて甘いのよ。助手なめないで」

助手さんはにやっと笑って見せた。ロリキャラ属性が瞬間的に崩落して行く。さっきもなんとなく思ったけど、この人バトルジャンキーでバトルの時と普通の時では性格変わる？　その裏設定はあんまりうけないけどね。

まぁ、多分楽勝だよね。サンはこの前気が向いたから笑えないほど鍛えちゃって、今４７Ｌｖになってると思うし。私のことをなんだかんだでなめてるっぽいから、メタモンのレベルはあんまり高くないはず。それに、私の読んできた二次創作の中で裏パラメーターをもともと知っているっていう設定のは多分ほとんど無かったし、きっと大丈夫。

もっとも、メタモンってＨＰとＬｖ以外は全部コピってくるから、あんまり意味は無いんだけれど。

「さて、バトルを始めましょう？」

人格がやっぱり完全に変わってるよ。審判のセリフもなしに攻撃してきそうな勢い持ってるし。弱気ロリっ子属性は燃えカスになっ

て消えたか。

肝心な審判はといえば、こっちの茶番が終ったのを確認すると、さっき言おうとしていえなかった言葉の続きを始める。

「これから飯井崎助手とハンターさんのバトルを始めます。細かいルールはなしで。では、始めてください」

お互いにさすがにここではツッコミをせず、バトルは始まった。否、始まったんじゃない。終ったんだ。

私には指示を出す暇さえなかった。そのチャンスはあったかもしれなかったけど、結果的に私は指示を出せなかった。

ここはゲームとはなんとなく違うってわかってたのに。

メタモンはバトルが始まってから、指示もなしにいきなり私のサンを潰すように飛んできた。サンだってこっちにきて数秒でいきなりバトルが始まって、どうすればいいのかわからなくて、焦っているみたいだった。右と左とを見て、きょとんとしている。そんな状況なのにバトルは始まっていて。

メタモンはゲーム内ではへんしんとか悪あがきくらいしか使えな

い。けど、体当たりとかかみつくができないポケモンがいるわけ無いんだ。

「あら、つまんない。どうやら本当にハンターさんじゃなかったのね」

誤解は解けた。けれど、なんら嬉しくなくって……

初めての敗北って意外と苦いんだね。

4、再戦（後書き）

すみません。またミスりました。
まぁ、とりあえず更新なのです！

5、ロリっ子は理不尽なのさ

「さてと、ちょっと待っててね。旅用のポケモン持ってくるから」

「はい？　意味不明なんですけど」

あれ、さっき勝負に私が負けたら、私はハンターとして通報されるんじゃなかったんだっけ？　どうしてそんな事を。

「いい？　ここに入ったらどんな形であれ、まず私のメタモンが見つけるわけ。そこでメタモンを叩きのめさないとハンターなんてできるわけないのよ。そこで叩きのめされたとしても外の世界に戻されるわけじゃないから、そこにいっぱなしで、その間に私に報告されるはずなの。もし、メタモンを倒したとしたなら、ここでもう一度同じようにやればいい。倒されて、報告される前にこんなことになったのならメタモンの癖はわかってるはず。だから、同じようにやられるわけないの。故に、あなたはポケモンハンターじゃない。どう？　すごいでしょ。私のメタモン」

「はぁ……」

そうだったんだ。なにそれ、何か詐欺にあった気分です。このメタモン軽くチートじゃん。なんでそんなのとさしでやらなきゃいけないのよ。

「でも、なんで旅用のポケモンなんて持って来るんですか？」

「えっとねぇ、私のところのクロムをそろそろ旅させようと思って。あなた負けたんだから、私の言うこと聞いてくれるよね？」

「なんでそうなるの？　約束なんてしてないけど」

「今決めた」

「ひどい！」

なんて理不尽。だけど、人差し指を突き出して笑顔で言われると、妙に可愛くて何もいえなくなってしまう。さすがロリっ子属性。

「まぁ、いいでしょ？」

「いいですけど、クロムって誰？」

「あの子」

助手はさっきからほとんど喋っていないゴスロリ少女の方を指差す。あの子がクロムね。名前と見た目がとってもあってる。名前と見た目といえば、シロナさんって全く合ってないよね。いつも黒いドレス着ているのにシロナさんだなんて。心が白いとか？　うん、よくわからん。

そういえばといえばそういえば、クロムもシロナさんとおなじ長

めの金髪で黒い服。なんか縁でもあるのかな？

「じゃぁ、さっさと取りに行ってくるから待っててて頂戴」

それだけ言うと助手はビューンという効果音が着きそうな勢いで研究所の方に戻っていってしまった。っていうことで、クロムと私で二人っきりです。ってえぇぇぇ！

クロムといえば私を見て悲鳴をあげた人だ。そんな人とどう付き合えと。そういえばさっき、一緒に旅しろって言われたような。

「否、私にどうしろと」

私はちらちらとクロムの方を見ながら呟く。クロムの方といえば相変わらず俯いている。表情は帽子に隠れて全く見えない。だけど、なんとなく敵視されているような気がする。

しょうがない。無言で待つか。

そう決心した頃を見計らってか、いきなりクロムが言葉を発する。

「名前、何ていう？」

その声はさっきの妙な嫌味を言っていたときと違って、一生懸命で本当に必死なようなきがした。相変わらずくもぐっていて聞こえにくいけど、影に何かを感じた。

ちょっと後悔。敵視されているようななんて考えたこと。もしかしたら、彼女だって友達になりたいのかもしれない。ちゃんと話したいのかもしれない。

「空（うつほ）。倉形（くらかた）空だよ。クロムは苗字ある？」

話を続ける方法が思いつかなくて、なんとなく名字を聞いてみる。すると、クロムは少し考えてから首を左右に振ってみせる。無いみたいだ。

「じゃぁ、飯井崎助手の下の名前わかる？」

このまま話してみよう。そしたらなんか新しい発見がある。そう信じて適当に聞いてみる。クロムはまたも少し考えてから左右に首を振った。もしかして、ここでは名字か名前かどちらか一つしかない。否、そうじゃない。ナナカマドとか飯井崎っていうのも名前なのかもしれない。なんか名前だって勘違いしてたけど。それでもまた正しい気がする。

でも、それだったら名字って言葉がわかるわけ無いんだ。否、もしかしてクロムは名字って言葉の意味を考えてた？

「名字って言葉の意味。わかる？」

そう聞くと、クロムはすぐに左右に首を振った。やっぱりここには名字も下の名前も同じなんだ。

「ありがとう」

そう呟けば、またもクロムは俯いてしまった。照れているのかな？

暫くすると飯井崎助手は小さなリュックと謎の黒いスーツケースをもって来た。きっと、リュックの方が旅道具で、スーツケースの方がポケモンのケースだろう。

「えっと、室内の方がいい……」

「ここの方がいいです。絶対に！」

「なんで？」

「あの部屋にポケモンを出せるスペースなんてないですよね？」

「あ、そうね。書類に足跡がついていてもしょうがないわ。あったまいいわね」

「あなたが悪いだけでは？」

「否定できない！」

なんか私が毒舌キャラっぽくなってしまっているけれど、それは助手がボケすぎだからなの。けっして、私は毒舌なんかじゃないんだからね！

「で、まずポケモン選びから始めましょう。えっと、……」

「空（うつほ）です」

「空ちゃんはもう大量にポケモン持ってるみたいだからいらないわよね。むしろ、さっさと逃がしてあげるべきよね。後で転送システム使わせてあげるからちょっとまってて」

助手は苦笑いを浮かべながら、手元ではこまこまこまこまとスーツケースをあけようとしている。どうやら鍵（数字を合わせる奴）がかかっているみたい。でも数字が思い出せないのか、適当にかたかたかた動かしてばっかで、勿論バックは開かない。

「えっと、数字思い出せないんですか？」

「そ、そんなことはないのよ！　き、気のせいなんだからね！？」

助手は焦りながらも、鍵を開けようと頑張っている。どうやら本気で忘れているっぽい。ピッキング（犯罪です）してあげよっかな？　そう思って話しかける前に、鍵はパキッと開いた。

「って、鍵壊してませんか！？」

「気のせいだから、さっさとポケモンを出しましょう。ほらほら、クロムちゃんも近づいて！」

助手はやっぱり焦りながらも、ニコニコ笑って手招きをする。クロムは面倒くさそうにゆっくり歩いてきた。そして、ちょうど私の右隣にしゃがみこむ。それをみると助手は丁寧にカバンを開いて見せた。確かにゲームみたいにモンスターボールが三つ入っている。

「えっとね、この子がポッチャマでこの子が……出しちゃった方が早いわね。よし、でてきなさい！」

助手は右手に三つのモンスターボールを手に取ると、ボタンを押してポケモンを出した。お約束の発光や妙な効果音が響く。そして、その中から現れましたよ！　シンオウ御三家！

やっぱり、ゲームの外側と中では可愛さも全然違う。なんか可愛くないって思ってたヒコザルもなんか可愛く見える。

けれど、そんなのは最初のちょっとした瞬間だけだった。

「え？」

私が呟いた時にはもう遅い。

ポッチャマは小さな羽で、ナエトルはその体で、ヒコザルはその爪で一斉にクロムを攻撃してくる。

でもクロムといえば、そんな事態なのに全く焦っていない。むしろ、少しだけ微笑んでいるような気がした。おもしろそうに、否、馬鹿にしている？

「きて……」

唇を動かすだけで、声は出さずクロムは言った。そして、次の瞬間には目の前が焼け野原になっていた。さっきまで三匹がいた場所、全体がだ。けど、その範囲は私達人間やカバンだけは的確に避けていて、本当にものすごい技術。そこだけに油をまいていたかのよう、とでも言えばいいのか。

もし、これをポケモンのかえんほうしゃでやったなら……できなくもないけど、普通できない。よほどの腕がなければ。

なんで、一体。どうして。

「ポケモン、いりません。私にはレムがいる」

クロムは真っ直ぐと助手を見つめながらそう言い放った。ひざには美しいキュウコンをのせながら。

5、ロリっ子は理不尽なのさ（後書き）

はい、新ポケモン！
クロムちゃんの手持ち発表みたいなっ！？

相変わらず謎展開ですみません。

あと、エイプリルフールの短編を活報に上げておきましたので、良かったら見てくださいな（ただ、本気で推敲してないので誤字脱字だらけです）

6、世界ぶっ壊れろって思ってますが何か（否、嘘ですけど）（前書き）

～あらすじ～

なんか知らないけど気づいたら、旅出ることになっちゃいましたぁ！

しかも、赤の他人の無言ゴスロリ少女――クロムと共になんですよ。否、前途多難だなぁ何て思ってたら、最初のポケモン選びの時に問題が発覚しました。

クロムが何処までもポケモンに嫌われてるみたいなのだぁ！

6、世界ぶっ壊れろって思ってますが何か（否、嘘ですけど）

「えっと、キュウコン？」

私は自分で考えてもすっとんきょんな声でクロムに聞く。クロムは一瞬不思議そうに目を見開いたけれど、こくりと頷いた。普通にキュウコンみたいだ。何時も名前で読んでるから、不自然に思ったのかな？

「もう、駄目じゃない！　レムも悪い子じゃないのよ？　だけどね、旅には新しいポケモンを育成しながら、共に成長して行くっていう意味もあるの。レムはもう大人になっちゃってるし、第一従順すぎるのよ……」

助手は一気にまくし立てるように話した。最初はちょっと困ったような顔をしていたけれど、途中からは過去のことでも思い出しているのか見る見るうちに声が小さくなり、最後なんて溜め息のようになってしまった。このキュウコン、なんかやらかしちゃったのかな？

それに従順すぎるって言うのはどういう意味を持ってるのかもわかんないし。従順なら悪いこともないんじゃないの？

「それに私、嫌われてる。ポケモンに」

「そんなことないわ！！」

助手、たまにはいいことというじゃん！　なんか下がりかけていた雰囲気が少し、温まったような気がしたよ。当の本人のクロムはいぶかしむように飯井崎助手を見つめていて、信頼０％だけど。

しばらくそんな空気が続いた。途中途中に生暖かい風が吹くもんだからどこか気味が悪くて、静寂が終る気配もないし。響くは葉のこすれる音のみ。太陽も雲に隠れて、今にでも一騎打ちが始まりそうな雰囲気だ。

それで、楽観主義で考えるのが苦手な私が耐えられるわけないんだよ。

「えっと、キュウコンのことと、ポケモンに嫌われている話を要約して教えて欲しいんですけど……」

空気が凍りました。

軽く、小さな声で言ったはずだったのに、その言葉を言った瞬間かすかに吹いていた風までピたって止って、息遣いの音さえも聞こえなくなった。さっきまで嫌な雰囲気出しながらも顔上げてたクロ

ムは俯くし、助手でさえ目を閉じる。爆弾投下しちゃったかな？

「レムのやったことを少しだけ話しましょう。彼女がここにきて少し立った時のことよ。クロムがうっかりしてレムと一緒に森で迷っちゃったことがあるの。その森はここではないんだけど、何かポケモンに追われててそうなってしまったらしいの。まぁ、ここまでは結構何時ものことよ。最近でも良くあるから、携帯もたせるようにしたんだけどね。彼女どうやってココまで帰ってきたと思う？　森を殆ど焼いちゃったのよ。レムの技で」

「は？」

「本当の話よ？　森を焼いて、道にぶち当たるまで焼きまくったの。私も研究所で仕事してたらその様子が見えて、悲鳴を上げそうになったわ。大惨事になるかもしれないからって、周りに知らせまくったものよ。その後クロムが帰ってきて真相を知ったわけ。クロム自身はけろっとした顔してたわねぇ」

えっと、やることが大きいとしか言いようがない。っていうか、森が私有地だったら放火犯なのでは！？　気のせいなんだ。きっと気のせいだ。

確かにアニメに出てくるようなポケモンたちなら、自我はあるはずよね？　だから、いけないって思ったことには逆らうし、トレーナーを攻撃したりもする。でも、レムはそんなことをしなかった。

レムはクロムの言うとおりに、技を使って自分の故郷かもしれない森を焼いてしまった。

「研究所の近くだったから何とかごまかせたけど、他の場所だったらそうは行かないわ」

「はぁ。それなら確かにレムと離れていた方がいいかもしれない。だけど、なんであんな攻撃されちゃったの？」

「私がいろんなものを嫌ってること、きっとわかってる。そんな人と一緒にいたくない」

珍しくクロムが素直に答えた。さっきまでは途中途中だんまりしていて、こんな長くも話していなかったのに。心を許された？　とか。まさかね。

動物はいろんなことに過敏だって聞く。例えば、ウサギなんてかまってもらえないだけで死んでしまうっていう逸話があるし、地震が来る前に動物たちは何らかの反応をするらしい。ポケモンも同じなのかもしれない。だから、クロムを嫌って……否、それも正しいけど話が解決しない！　うん、発想の転換だ！

何か思いつかないかな。自分。頑張れ自分！

「大丈夫、クロム。今から頑張っていけばいい話でしょ？　私ね、沢山イーブイ持ってるの。しかも全部生まれたて。一生懸命あいしてあげれば、答えてくれると思うよ？　第一レムはクロムのこと嫌ってないでしょ？」

だってウサギだし。うん。生まれたてだから何にもわかんないことを期待しよう。

ただ、本人があんまり乗り気じゃなさそうなんだよね。今度はこっちの方をいぶかしんでにらんでるし。怖いよ。やめようよ。こういうの。

でも、何か納得したのか少しだけ顔を赤らめて微笑む。何も言わないで。飯井崎助手はそれを見ると、やったあっぁ！　と叫んで飛び上がった。

もういい年なのに自重しろ！

6、世界ぶっ壊れろって思ってますが何か（否、嘘ですけど）（後書き）

なんか携帯のポケモンバージョンがあった気がします
名前知っている人いたら教えてくれるとうれしいです

誤字脱字その他諸々ありましたら、感想の方に書き込んでくれると
嬉しいです。
ではでは

7、旅立ち（？）（前書き）

作者ももういい加減にしろって思い始めたので、旅立たせちゃいます。

7、旅立ち（？）

まぁ、あのあと転送システムをいじったり、イーブイを渡したりで色々時間がかかってしまった。そうそう、転送システムって言えばあの２００匹単位のイーブイのほとんどは逃がすことになってしまった。仕方ないけどね。

――後日研究所付近でイーブイの大量発生が目撃されることになるのを、空はまだ知らない。

だけどちょっと残念だなぁ。みんなモフモフでかぁいいんだもん。大好きだったよぉ！　なんて、言う権利ないか。パラメーターのために卵生ませては、数字つけてなんて作業やってたんだからさ。そのために資料までまとめて、最後は適当に放置しかけちゃったりして。そんなやつがかぁいいから、大好きだからとかいっても現実味ないというか、ね。ＢＷのＮの言葉レベルで違和感。Ｎは可愛かったけど。

ついでに、クロムとイーブイは結構馴染んでいた。最後には肩にのせたりして、某ピカチュウ少年みたいだ。途中途中、レムがウゥーっと低い声でうらやましそうに唸っていたけれど、その様子にも気がついてないみたいだった。基本ポケモン好きなのかな？　それだったならすごくいいんだけど。

っていうか、あれって多分ポケモン嫌いなんじゃなくて、ポケモ

ンを使う人間のことが嫌いだったから、自然と飼われるためのポケモンとかが嫌いになってたのかもね？　心のそこで、どっか蔑んでた……みたいな！？　いや、根拠もない空ちゃんの勘なんだけども。

「キモイ……」

「何か言った？」

「な、なんでもないよ！」

本音が口から出てしまったらしい。

クロムは訝しげに、じーっと金髪の下から私を見つめたあと、そっぽをむいてしまった。その子供っぽい動作が本当にかわいい。見た目がちょっとばかし大人っぽいのと相まってだ。美少女はやっぱり所作がかわいいよ。

「ねぇ、そろそろ出発しよ？」

「えぇぇぇ！　行っちゃうの？　一晩位泊まってってよ」

飯崎助手、あなたは正直関係ないんですけど。でも、そんなふうに見つめられると断れないんですけど……。クロムも面倒臭そうに振り向き、私のことを見つめてくる。非難するように。泊まれってことですか？　しゃべらないのやめてよー。

「泊まっていっていいですか？」

しょうがないし、妙な敬語で助手に聞いてみる。クロムはそれを見ればまたそっぽをむいてしまった。ツンデレか？　ツンデレなのか？　私が好まれている前提こそが間違っている気がするけど。

「本当！　嬉しいわ。泊まってて頂戴」

「ひ、一晩だけしか泊まりませんからね！」

その楽しそうな顔が、怖くて声が強くなってしまう。まぁ、事実そんなことを考えていたのか、飯崎助手はガーンと背景にでそうな程にがっくりした表情を見せた。先に釘さしといてよかった。まったく、自分で旅に出ろと言っときながら。このロリコンめ。助手本人もロリだけど。

そのとき、噴き出そうとして失敗したような、ブッという音が聞こえた。ちょうどクロムがいる方向から。ってことは、え？　クロムが笑ったの？　無表情少女が？

「クロ……ム？」

「な、何？」

「笑った？」

「だから？」

「クロムが笑ったぁぁっ！」

助手ーさっきと同じノリです。ってか、本気で飛び跳ねるのやめてください。ただの痛い人ですから！　背景に花飛んでる当たり本当に痛い人ですからっぁ。

ってか、某アルプスの山の少女みたいなことやらないでくださいよ。クロムが軽蔑するような眼差しであなたを見つめているのに気づいてください！

◇

で、本気で泊まりました。

毒物とか色々変なものを食べさせられそうになった気が……気のせいです。

「はい、あーん」

気のせいです。

「さっさと食べなさいよ。ほら、二人とも残さない。おかわりは沢山あるんだから」

「「だって……」」

「しゃべらない。私の飯がまずいっていうの？」

「「まず（（ｒｙ殴おいしいと、思われます」」

「ふーん、まぁいいことにしてあげる」

バトル意外でも、酒が入ると正確が変わるらしいです。「だから、彼氏できないんだよ！」は禁句みたいだけど。

わいわいした晩ご飯は結構久しぶりで、楽しかったな。クロムは照れたりそっぽむいたりの繰り返しだったけど。話してたのはほとんど飯崎助手だったけど。

そのあと、風呂とパジャマとを貸してもらうことになった。全く知らない少女相手に、ここまでつくせるなんて本当にすごいよ。服もたくさん上げるって言ってたような気がする。まぁ、セーラー服だけじゃ困るもんね。旅し始めても、仕送りと一緒に贈るって言ってくれたし、本当にありがたい。用心棒代っていう線もあるけど、

そんな感じが何かしないんだよね。

そういうのって、嬉しいかもしれない。素直じゃないな、自分。

「さてと、貸してくれるって言うし風呂はいろうかな」

今日は何か妙に（冷や）汗沢山かいちゃって、せっかくだし髪も洗おう。シャンプーないはずもないし。石鹸で洗うことになるのならば……うん、やだな。

そのとき、風呂の扉がひとりでに動いた。いや、内側から開けたっていうのが正しいんだけど、次の瞬間出てきた人は私にぶつかり、転ぶ。間抜け、な感じだけど何か可愛い。えっと、誰かな？　助手かクロムってことなんだけど。うん、クロムだな。金髪で髪長いし。ただ、タオルを腰巻っぽくしてるのがちょっと違和感なんだよね。女子でもそうやるけど、うん、気のせいだ。だってあんなに華奢なんだし。

「おーい」

私が耳元で呼びかけてみると、起き上がり小法師みたいにさっと起き上がる。……え、うん、やっぱりか。っては？

「どうかした？」

「なんか不躾な質問なんだけど」

「うん」

「クロムは女の子だよね？」

私はできるだけ真剣に聞いてみる。

そして、真剣に聞いたはずなのに殴られました。眉を少しだけ釣り上げた顔のクロムに。怒ってる？

「馬鹿」

彼女――いいや彼はそう言うとすたすたと歩いていってしまった。少しだけ足音が大きくなって、廊下に響いていく。

「うん、そうなんだって、ええぇっぇ！！」

7、旅立ち（？）（後書き）

どうやら終わらないっぽいです。
それと、晩ご飯の話と転送システムの話はいつか活報でかきますね。
ではでは

次回予告
いよいよ、旅立ちか？
女装男クロムと、普通の女子中学生空の運命はいかに！

8、旅立ち（！）（前書き）

危ない。学校忙しくて定期更新がストップしかけた……

感想の返信はまたいつか

8、旅立ち（！）

「では、私から言えることはもう無いわ。いってらっしゃい」

「……ありがと」

それは快晴のことだった。もしポケモンが光合成をするならば、最大限まで体力が回復できるようなそんなすばらしい快晴の日、その雲ひとつないそらに似合うような笑みを浮かべて彼女は立っていた。たまに少し目尻を下げるものの、でもそれはまた一瞬で心のそこから喜んでいるように見えた。

旅立ち、素晴らしきものであるとは思うものの送る方としてはちょっとさみしいとも思えるのだろう。

旅立つその張本人はいつもどおり目を伏せているというのに。

「で、私たちはどうしてこんな素晴らしい旅立ちの日にコスプレをしてるの！？」

「ごめんね、それしか服がなかったの」

「嘘だっぁああ！！」

某少女のように叫んでみる。

いや、本当になんで私はコスプレをしてるのかな？　私のイメージする旅ってこんな格好じゃできないって思うんだけど。

まず私がきている服というのは巫女服だった。足袋まで用意してあって、しょうがないからそれを履いている。足の裏が痛いけどしょうがない。それに、巫女服って実は下に何枚か肌着を来た上に切るから少し扱ったりする。多分春だもんね。

昨日の夜泊まらせてもらった部屋の窓から外を見ると、タンポポやらチューリップやらそれに混ざってチェリムやら、見上げれば月の光に浮かぶ桜やら、きっと春だと思う。夏になれば、この辺の桜も散って花も別のが咲くのかな？　それとも、ゲームだからやっぱり花はこのままなのかなと考えたりするけど、結論が出る前に寝てしまった。変なこと考えてもしょうがないし。

そして、起きてみたらその部屋の小さな机の上に巫女服がのせてあった。最初は間違えてるとかなんとか言うために一階まで降りて助手を探し、その旨を伝えたんだけど、そしたらセーラーは洗ったしね？　って軽く笑いながら助手は言って。着方がわからないっていえば、私が教えるって言い返して、そんな感じで結局着させられてしまった。

もしかして旅の間に送ってくれる服っていうのもコスプレ？　ま

さかね……否定できないよ！

っていうか、なぜかここに来た時から左手に付きっぱなしになっていた数珠のブレスレットが妙に似合うよ。

ただ、私より残念な服を来ている子がいた。クロムだ。少年のクロムだ。

あのあと問い詰めたところ、残念ながら常識がないことが判明した。同世代の友達なんていないばかりか、ちゃんと話したことがあるのは助手と私だけだとも。たまに隣町に行くことがあったらしいけど、そこでもやっぱりあんな服ばかり買っていたため、おかしいとわからなかったらしい。

うん、そういうことがあっても悪くないし、あの見た目だったら少女にしか見えないよ。むしろ助手さんＧＪだよって一瞬思ったけれど、すぐに訂正。これから少しづつ普通に戻せたらって、なに思ってるのかな？　彼氏と連絡も取れないくせに。

っと話が脱線した。

それでクロムは今日も少女用の服をきていた。違和感は見たところも本人もないっぽいし、いっそあのまま通しちゃってもいいほどだった。だけど、あの可愛さはきっと今だけなんだ。

で、その少女用の服がシスターの服だった。あの黒くって、裾の長いあの服だ。ご丁寧に首には本格的なロザリオまでかけている。あの一個一個つぶが通してある、どうにも首が痒くてしょうがないやつだ。学校で軽く洗脳されてキリスト教が脳内に侵入している人として残念なのかはよくわからないけど、その十字架にはさすがにキリストは括りつけられていなかった。まぁ、くくりつけてあったらむしろ趣味悪いようにしか思えないんだけど。

クロム自身はだから何？　って感じなんだけど、見ていて妙に似合っていて素敵。昨日よりもずっとシロナさんに似て見えた。まだずっと幼いんだけど。

「まぁ、いいじゃない。そろそろ行きなさい。ここで引き止めていてもしょうがないわ」

よくないって。

助手は適当に笑いながら左手でしっしっと鳩を追い払うように振る。

「じゃぁ……連絡はする」

「お邪魔しました」

一晩だけだったし、最初は犯罪者って思われていたけど、助手のことが少しだけ懐かしくて寂しく思えた。

「コスプレ、ちゃんと着てよね？」

訂正、この人は唯のコスプレオタにしてロリコンです。

8、旅立ち（！）（後書き）

って感じで旅立ちます。
今度こそ旅立てました。
次回との間にキャラ紹介入れられるように頑張ります。
ではでは

キャラ紹介

はい、
どうもー
お久しぶりのドロシーです。
今回はキャラが増え始めてきたし、区切りがいいので
キャラ紹介第一段行ってみようと思います

本当は短編も更新したいんですが、
残念ながら二次……なんでもないです
忘れてください

オマケで作者ドロシーとの対話を作ろうかなとも考えたのですが
なんか嫌な予感がしたのでやめときました

キャライラストは暇なときにでもあげられるように頑張りますねｐ
（＊＾－＾＊）ｑ
ただ、そんなことをいって永遠にあげ……気のせいなんだからね！

倉形（くらかた）　空（うつほ）

この話の主人公にして、唯一のツッコミ（予定）
小動物系のかわいい子（身長がひ……きゃあぁぁ）
自称Ｍ
ついでに、最初の服はセーラー服で次の街までは巫女さんの服で行
くつもりです

持ってるポケモン
イーブイの進化系
パルキア
ヒンバス
その他諸々

クロム

この話のヒロインを予定していたんだけど気づいたら少年になっていた
あんまりしゃべらない
しゃべったとしても口が悪い
見た目はシロナさんに似ている美少女
ポケモンに嫌われやすい
ついでに、最初の服はゴスロリで次の街まではシスターの服で行くつもりです。

持ってるポケモン
キュウコン（レム）
イーブイ（空から貰ったもの）

飯崎助手（いいざきじょしゅ）

ロリっ子な研究者
実は三十代らしいけど、実際はわからない

人にコスプレをさせるのが大好き

持ってるポケモン
メタモン
その他諸々

冒険はまだまだ続くぅ！

閑話　悪の頂点は海産物（仮）

「ここはどこだ？」

少女は地面にぺたりと座り込みながらも、空を見上げる。見上げた空はどこまでも青く、ところどころに山も見えた。当たりは森に囲まれ、まさに自然の中という状況だ。

「東京にこんな自然があるわけないから、きっとどっか別のところだけど……。どうやってここまで来たんだろう？」

彼女はつぶやくと、大きなため息をついた。短めの髪が風でパサパサと揺れる。森の方からは何匹か小鳥が飛んできた。彼女はそれを見て怪訝そうに眉をひそめると、にこっと笑ってみせた。

「ま、いっか」

よっこらせ、そんな言葉が似合うような動作で立ち上がると、ズボンについた土を払う。ふと、彼女は何かに気づいたのか背負っていたリュックを前に持ってくると、中を物色し始めた。まるであの時の空のように。

彼女は何かに気づいたのかリュックをひっくり返す。すると、ま

たあの時のようにモンスターボールが大量に落ちてきた。効果音がするほどではなかったけれども、かなりの量だ。

こんな状況でもそれなりに冷静でいた彼女も、この状況には驚いてしまったのか動作が完全にとまる。響くのはモンスターボールが転がる音だけだ。

「あら、落し物かしら？」

そのときだった、彼女が少女の背後に現れたのは。その左手にはモンスターボールを一つ持ち、微笑んでいた。少女は一瞬びくっと肩を震わせたが、やがてゆっくりと振り返った。その顔には何も浮かんでいない。本当はポーカーフェイスなのだ。

「怖がられちゃったかしら？」

彼女は笑う。それと同時にまた風が服。彼女の金色の髪や、黒いワンピースの裾、少女の髪やらが揺れる。

「だけど、もしかしてあなたには頼れる人が居ないんじゃないかしら？　それならば、一緒にこない？」

「名前も名乗らない人とはちょっと……ねぇ」

少女はやっとしゃべる。その様子には先程までの恐怖などは微塵も現れていない。ただただ困っているようだ。

「あら、なんとなくわかってるんじゃないのかしら？　シロナよ、シロナ。あなたは？」

「やっぱり。私はですねぇ、そうだ、エビとでもよんでくださいな」

「一緒にきてくれるってこと？」

「何か不都合でも？」

エビは首をかしげる。それが妙にどうどうとしていて突っ込む隙を与えない。シロナは楽しそうに笑った。普段笑わない彼女がだ。

「面白い。ええ、すばらしくおもしろい。あなたを選んで正解だったわ」

シロナはエビの背に合わせるようにかがむ。そして、手を差し出した。エビはその手をつか……まない。シロナは無理やりエビの手

をつかんだ。

「よろしくね」

「また、強引で」

――この時はまだ誰もしらない。彼女が後に強大なる悪の組織の頂点に君臨することを。

閑話　悪の頂点は海産物（仮）（後書き）

すごい、短くてすみません。
実は最初の街の名前を忘れて、急遽書いたからネタがね、思いつきなんだね！
エビは存在してたけど、シロナさん絡むとは思ってなかったわい。
誤字脱字その他もろもろありましたら報告よろしくお願いいたします。

1、で？　はい？

「それで、なんで早速迷ってるのかな？」

今の状況を確認しよう。私たちは隣の街に向かってるだけなんだよね？　それなのにどうして舗装されてない道、しかも木々で薄暗いところを歩いているのかな？　何かがおかしいよね。

現実逃避していいですかぁぁ！？

「……逃げない」

静かにクロムに突っ込まれてしまった。

でも、でもね！　この格好歩きにくいんだよ？　靴だけはアンバランスなことにランニングシューズだけど、裾をふみそうで大変だ。それに、持ってるバックはスクバのまま。肩に紐が食い込む。

「森、全部焼く？」

「結構です！」

ダイオキシン大量発生とか見たくないです。

しょうがないから地図でも見るか、ってもってないんだ。

「地図、もってる？」
「焼いた」
「はい？」
「あんなのいらない」
「いるよ！」
「みんな焼き払えば……」
「やめましょう」

焼くの好きなの？　ねぇ？
そう突っ込みたくなる。まったく、ものの焦げる臭いなんてどこがいいんだか。

「で、どうする？」
「焼く」
「それ以外で！」

っとそのとき、右側の草むらが揺れた気がした。なんか出てくるかなとモンスターボールを構えたところ、ビッパが出てきた。やっぱり何度見てもアライグマに似ている気がする。

「どうする？」
「捕まえてみるからみてて」

捕まえる、ねぇ。がんばれとしか言いようがない。

そして、ビッパが出てきた瞬間モンスターボールのスイッチを押す。白い光と共にイーブイが現れた。

「とりあえずでんこうせっか」

「ぶい！」

まずは様子見かな？　っていうか様子見だね。でんこうせっかは無事ビッパに当たる、当たりはした。だけど、次の瞬間イーブイはビッパに抱きつかれていた。

「は？」

必死に逃げようとはするけれど、ビッパはしっかりと手を固めていて離れることはできない。そのとき悪寒がしたような気がした。気のせいだよ……ね？

「ブイィ！」

ただいまイーブイがビッパにキスされてます。

ただいまクロムがモンスターボールを（空気を読まず）なげました。

――ポカンとしている間にビッパは捕まっていました。

1、で？　はい？（後書き）

章分けしてみました（＃^．^＃）
見にくかったらすみません
そして投稿がめちゃくちゃ大変なんですが、はい。
そのせいでこれからしばらく短めになります。
今回なんて手、抜きすぎですよね。本当にごめんなさい。

誤字脱字その他もろもろありましたら報告よろしくお願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6919r/

ブイズがカバンから零れ落ちる――……

2011年10月8日22時01分発行